

【論文】

沖縄の各都道府県別の慰霊塔・碑の特徴

テキストマイニングによる分析

いとうたけひこ・宮崎郁江・杉田明宏

【要旨】

沖縄県に建立されている各都道府県立の慰霊塔・碑について文字データを分析することにより、慰霊塔の持つ意味を明らかにし、誰を慰霊しているのか、いつ頃建立されたのか、建立の経緯、碑文の内容、それらの相互関係などを考察した。その結果、すべての都道府県が建立しており、沖縄戦戦没者のみ慰霊した塔数は少なく、「大東亜戦争」という戦前の表現を使った塔も見られ、沖縄住民への共感と友好を謳った碑文は1基のみであり、沖縄の慰霊碑は全般的に平和学習の対象となっているにもかかわらず、都道府県ごとの慰霊碑は平和学習の対象となるべき内容が明示されているものは少ないことが明らかになった。それは、沖縄戦の体験が活かされていない、したがってその悲惨な実相が反映されていない、沖縄県民への言及が少ない、などの特徴的な性格をもっていることによる。

1 はじめに

(1) 沖縄戦と慰霊

沖縄戦は日本で行われた唯一の地上戦であり、23万人以上の犠牲者を出した。一番犠牲者が多かったのは沖縄県民であるが、各県から兵隊として派遣された兵士の被害も大きかった。それらの人々を慰霊するために、各県ごとに慰霊塔が建立されている。表Aは大田平和研究所(2005)による沖縄戦の犠牲者であり、それによると県外者も多数死亡しているが、そのほとんどは兵士として戦死した人々である。

(2) 沖縄の慰霊の塔の種類

元沖縄県知事の大田(2007)はその種類を、(1)都道府県の「慰霊の塔」、(2)守備軍将兵・無名戦士と住民を祀る「慰霊の塔」、(3)職域・諸団体の「慰霊の塔」、(4)男女学徒隊を祀る「慰霊の塔」、(5)沖縄県内市町村の「慰霊の塔」の5つに分類している。また、沖縄県平和祈念財団(2007)はその種類を、(1)大規模合祀・記念施設、(2)都道府県関係、(3)沖縄県・県遺族連合関係、(4)戦友・遺族関係、(5)同窓会・職域関係、(6)市町村関係、(7)そのほかの団体関係、(8)海外、の8つに分類している。いずれの場合も都道府県によって建立された塔は独自に分類されている。

表 A 大田平和研究所 (2005) による沖縄戦の犠牲者

日 本	出 身 地		刻 銘 者 数
		沖 縄 県	
	県 外	76,549	
外 国	米 国 (USA)	14,008	
	英 国 (UK)	82	
	台 湾	34	
	朝鮮民主主義人民共和国	82	
	大 韓 民 国	344	
合 計		239,801	

(3) 都道府県別の沖縄の慰霊塔

各県別の慰霊塔は激戦地であった南部地域に集中している。なかでも平和祈念公園の中に多くの塔が集中している。一つ一つに差はあるものの、敷地面積は比較的大きく取られているものが多い。

(4) 沖縄平和祈念財団(2007)の調査

沖縄平和祈念財団(2007)には都道府県別のものを含め、沖縄戦にまつわる慰霊碑が網羅されている。本書は、以下のような趣旨で調査・出版されていた。

「沖縄県は、太平洋戦争において国内唯一、一般市民をまきこんだ悲惨な戦場となり、多くの尊い生命、財産及び文化遺産が失われました。戦後、戦没者の遺骨収集作業は、いち早く地域住民、各市町村等により組織的に取り組まれるとともに、各地域において戦没者の御霊を弔うため納骨所や慰霊塔・碑が建立されました。

終戦から 62 年を経て当時の関係者や御遺族が高齢化、減少する中、悲惨な沖縄戦の体験を風化させることなく、戦争の歴史的教訓を次世代に正しく伝えるためには、沖縄県内にある慰霊塔・碑を永久に尊厳保持していく必要があると考えております。」(「はしがき」より)

この本では、都道府県別の慰霊碑は見開き 2 ページで紹介されている。そして、各県に記録があるためか、合祀者数などの細かいデータが示されている。沖縄戦では全県からの兵士が闘っており、これらの慰霊碑はその犠牲の凄まじさをあらわしているともいえる。本研究では、これらの慰霊碑のデータや碑文を分析することにより、沖縄県外からの沖縄戦犠牲者数などの客観的データとともに、慰霊碑の文面の意味にも着目し、都道府県立の沖縄戦慰霊碑の特徴を明らかにしたい。

2 本研究の目的と方法

本研究の目的は各都道府県が沖縄の地に建立した慰霊塔のデータを分析することにより、

慰霊塔の持つ意味を明らかにすることである。誰を慰霊しているのか、いつ頃建立されたのか、建立の経緯、碑文の内容、それらの相互関係などを分析する。

研究対象：沖縄県平和祈念財団（2007）が調査した各都道府県の慰霊碑の記述（pp.30-121）。

手続き：研究対象の文章をテキスト化し、テキストマイニングを行う。

分析方法：テキストマイニングのソフトである Text Mining Studio Ver3.2 を利用して単語頻度などの分析を行う。

3 結果と考察

(1) 全体的な傾向

表1をみると、沖縄戦戦没者のみが合祀されているのは、滋賀県、兵庫県、和歌山県、熊本県、京都府、島根県、大分県、愛媛県、鹿児島県、福岡県、の10県（約22%）であった。

県全体の戦没者を慰霊しているのは、宮城県、岩手県、山形県、福島県、香川県、長野県、三重県の7県であった。残りの29都道府県は沖縄戦戦没者と南方諸地域の合祀を行っていた。したがって、8割近くの県が沖縄戦以外の戦死者も合祀していた。

表1 敷地面積、合祀者数

	敷地面積	合祀者合計	沖縄戦戦没	南方諸地域
合計	61,673	1,226,333	77,591	970,330
平均値	1340.7	26659.4	1644.8	27723.7
最大値	8000 (東京都)	103500 (東京都)	10850 (北海道)	97000 (東京都)
最小値	314 (大分県)	839 (和歌山県)	432 (秋田県)	168 (石川県)

表2 管理団体

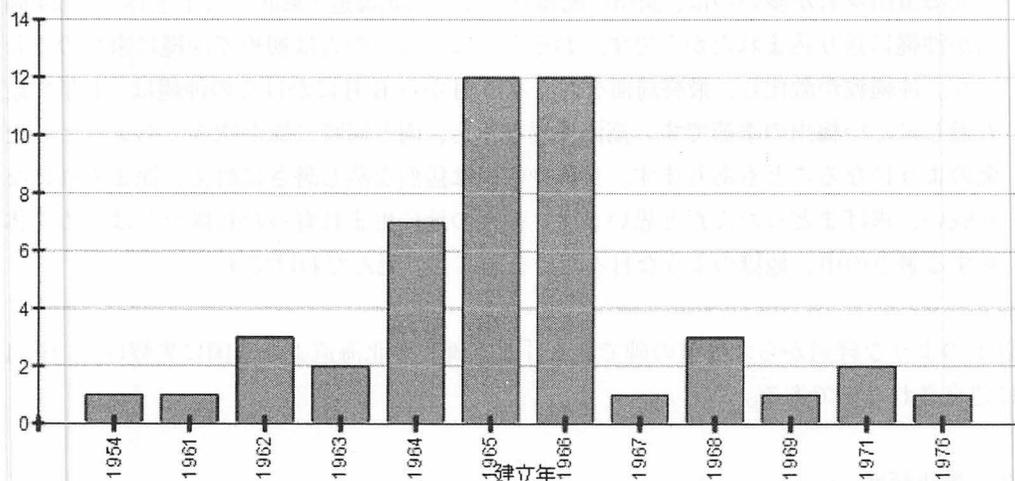
	件数	パーセント
都・県	19	41.3
遺族会	19	41.3
奉賛会	6	13
管理委員会	2	4.3

表3 テキスト基本情報

表3において総行数で46とあるのは、沖縄県を除いた全国の都道府県の数である。各都道府県の慰霊碑の説明に用いられている異なる単語（内容語）数は2011で、内容語総数は3800単語であった。語彙の豊かさを表す指標である、タイプ・トークン比(金, 2009)は0.72であった。

総行数	46
平均行長(文字数)	229
総文数	560
平均文長(文字数)	18.8
述べ単語数	3800
単語種別数	2011

図1 各都道府県の慰霊塔の建立年



(2) 建立年

図1は、各都道府県の慰霊塔の建立年をグラフにしたものである。1964年－1966年に建立が集中しているがわかる。なお、本研究では、ここから建立時期早期(1954－1963)と建立時期中期(1964－1966)と建立時期後期(1967－1976)に分けて分析を行った¹。戦後、20周年という節目に、渡航が大変だったにもかかわらず、建立ラッシュが起こったことが本研究の結果でも示されている。各都道府県が競争をするように建立したという事情が推察される。

北海道が最初に建立した背景について、大久保(2009: p.173)が以下のように説明している。

32軍は47都道府県すべての出身者で構成されていました。沖縄戦最後の激戦地になった糸満市にある平和記念公園の「平和の礎」には、御影石に全戦没者(米兵や朝鮮人を含みます)の名前が刻まれています。周辺には、全県の慰霊塔があります。遺族ら関係者が毎年供養に訪れ、修学旅行生とともに沖縄南部戦跡観光を支えています。32軍の県別構成は、沖縄以外では北海道が圧倒的に多く、平和の礎にも北海道出身者だけが県名ではなく「石狩」「十勝」などと支庁ごとに並んでいます。都道府県別の戦没者数は北海道が1万787人。次いで福岡が4013人、東京が3490人、兵庫が3196人、

¹ 建立時期については、村上(2009: p.100)の以下の説明が参考になる。「沖縄慰霊塔の建立時期については、戦後10年までが一つの山であり、もう一つは1965年と1966年を中心とした山である。これは、各都道府県が建立した沖縄慰霊塔(「都道府県慰霊塔」と記す)の建立がこの時期に集中したためにできたピークである。1965年は返還前で沖縄に行くのにパスポートを必要とし、まだ船による渡航が一般的で交通の便は悪かったが、戦後20年目という節目だったので、多くの都道府県慰霊塔が建立されて、沖縄戦の戦死者への慰霊が行われた。沖縄が日本に返還されるのは、このピークからさらに6年たった1972年である。」

愛知が 2970 人で、1000 人以上の死者を出している都道府県が 28 に上ります。

北海道出身者が多いのは、満州に配備されていた北海道・東北の兵士主体の第 24 師団が沖縄に送り込まれたからです。おそらくほとんどの人は初めて沖縄に来たのでしょう。沖縄戦が激化し、最終局面を迎える 5 月から 6 月にかけての沖縄は、1 年で最も過しにくい梅雨の季節です。高温多湿なうえ、雨と同時に風が吹き、ちょっとした嵐のようになることもあります。兵隊や住民は猛烈な蒸し暑さに耐え、泥まみれになり戦い、逃げまどったんだと思います。極寒の地に生まれ育った兵隊たちは初めて体験する暑さの中、地獄のような日々だけを過ごして死んだわけです。

以上のような経過から北海道の碑である「北霊碑」が北海道より全国に先駆けて 1954 年に建立されたのである。

(3) 単語頻度

単語頻度について見てみよう。図 2-1 は品詞を絞らず建立の経過、塔の由来、碑文を単語頻度解析にかけた結果である。ここから「塔」という名詞は、46 都道府県のうちの 36 県(76%) が使っていた。「平和」という単語を使っていたのは 20 県(43%)であり全体の半分以下であった。

戦争についての単語を原文参照して前後の表現に注目したところ、以下の結果となった。「太平洋戦争」9 県、「大東亜戦争」7 県、「戦争」5 県、「第二次世界大戦」3 県、「さきの大戦」2 県、「沖縄戦」1 県、「今次大戦」1 県であり、確認できなかった県が 17 県あった。

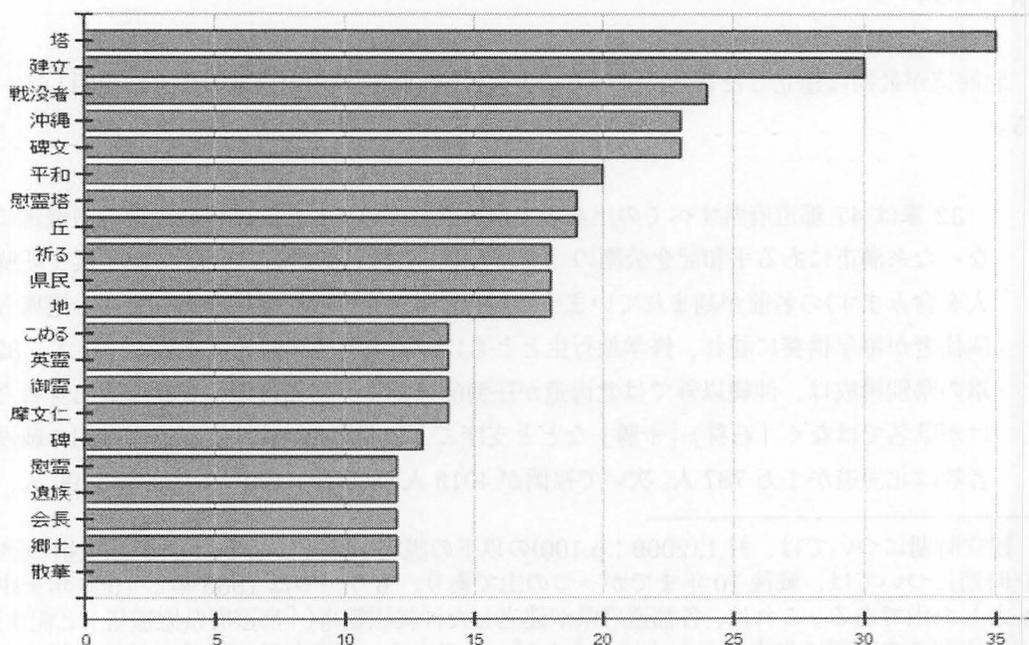


図 2-1 単語頻度全体

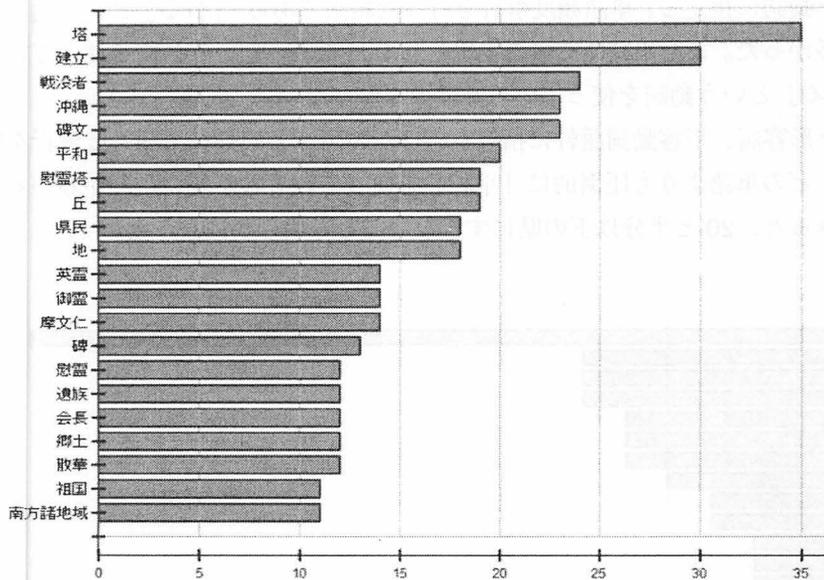


図 2-2 単語頻度 (名詞)

図 2-2 は品詞を名詞だけに指定して、図 2-1 と同様に、単語頻度解析を行ったものの結果である。「塔」、「建立」という単語を使っている県が非常に多かった。また、「祖国」、「南方諸地域」、「郷土」など場所を表す単語を使っている県が多いことも分かった。

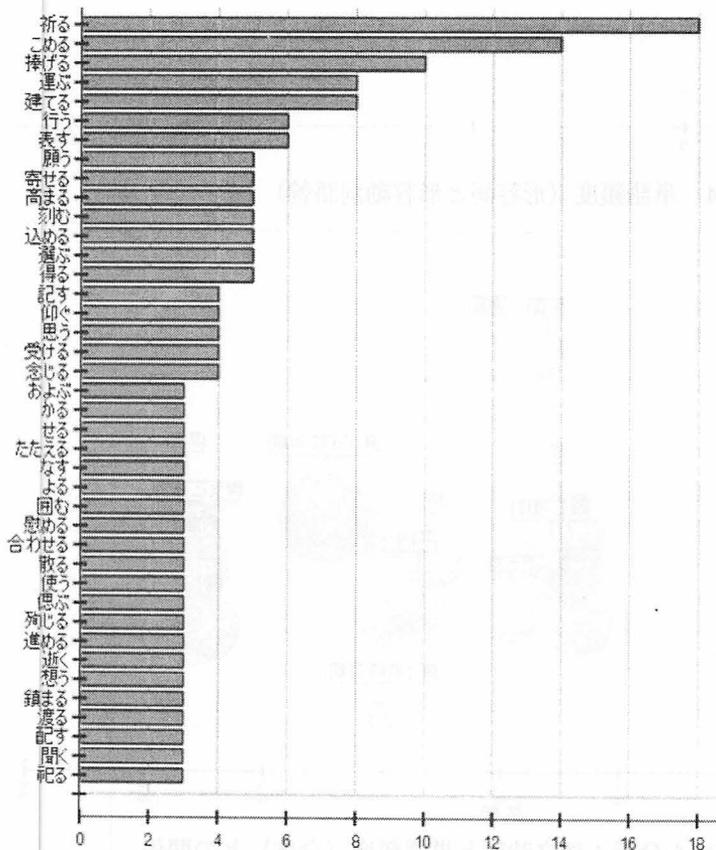


図 2-3 単語頻度 (動詞)

(4) 建立時期と単語頻度

1964年～1966年に建立が集中しているため、建立時期早期(1954～1963)と建立時期中期(1964～1966)と建立時期後期(1967～1976)に分けた上で、図3-1は初期、中期、後期のどの時期にどの単語が多く使われているのかについて、すべての内容語について品詞分けせずに、対応バブル分析を行った結果である。バブルの大きさは頻度を表し、バブル間の距離は関連性の強さを表している。摩文仁、英霊、祈り、散華、平和という単語は早期との距離が大きいことから、建立時期早期にはこれらは使われていない単語であることが分かる。

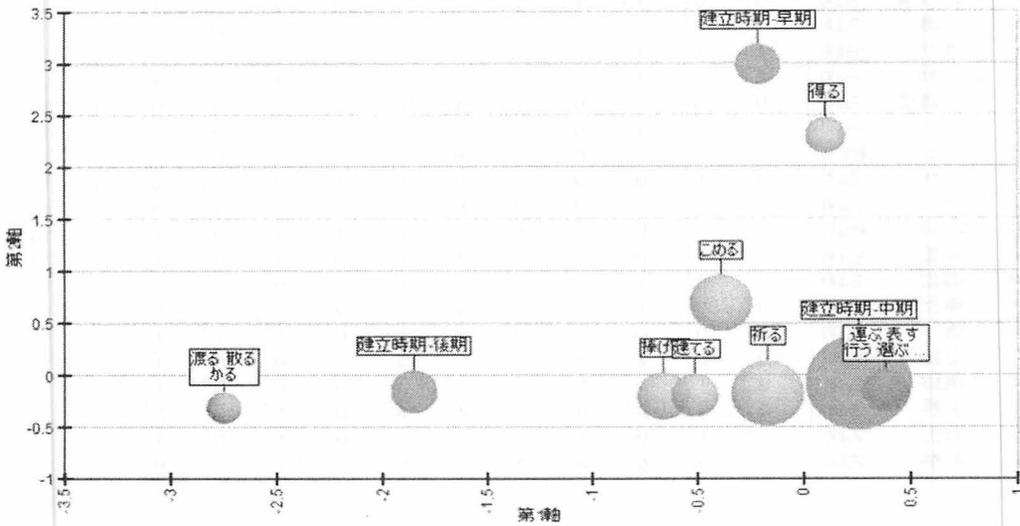


図 3-2 対応バブル分析：建立時期と動詞

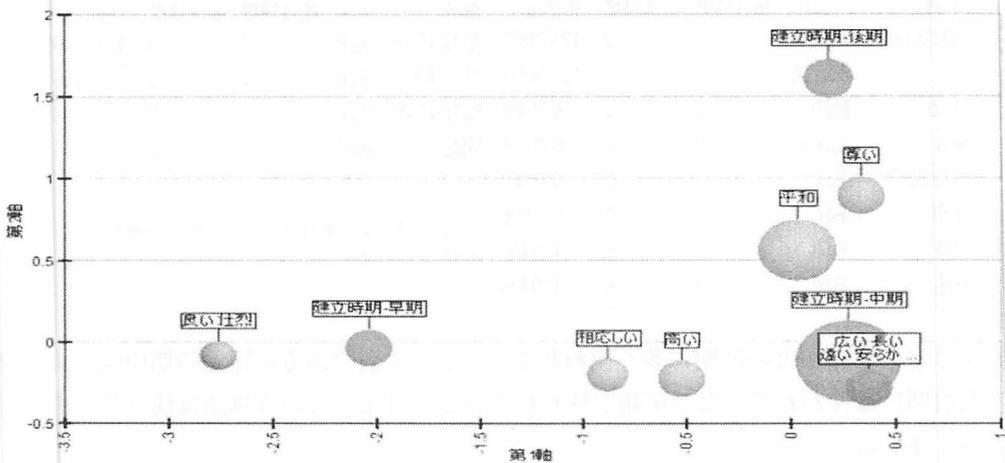


図 3-3 対応バブル分析：建立時期と形容詞・形容動詞語幹（名詞）の頻度
建立時期と形容詞・形容動詞の関係

図 3-2 は建立時期に分けて、品詞を動詞だけ指定し、対応バブル分析を行った結果であ

る。ここから、建立時期後期に「散る」、「渡る」などの動詞が使われているが、建立時期早期、中期にはほとんど使われていないことがわかった。

図 3-3 は他の対応パブル分析と同様に建立時期別にし、品詞を形容詞と形容動詞語幹名詞に限定した単語を分析した結果である。建立時期早期には「壮烈」などの単語が使われているが、中期、後期には「平和」や「安らか」など穏やかな単語が多いことが分かった。

表 4 単語頻度年次推移

単語	品詞	1954	1961	1962	1963	1964	1965	1966	1967	1968	1969	1971	1976	合計
1 塔	名詞	0	1	3	2	6	12	6	1	2	0	1	1	35
2 建立	名詞	0	0	1	1	5	9	10	1	1	0	1	1	30
3 彫刻家	名詞	0	0	1	1	2	6	9	0	3	0	1	1	24
4 沖繩	名詞	1	0	2	1	3	6	5	0	2	0	2	1	23
5 碑文	名詞	1	1	1	1	4	4	7	1	2	0	1	0	23
6 平和	名詞	0	0	1	1	2	6	6	0	1	1	1	1	20
7 慰霊塔	名詞	0	0	1	0	1	4	10	0	2	0	0	1	19
8 丘	名詞	0	0	1	0	2	7	5	1	1	0	1	1	19
9 祈る	動詞	0	0	1	0	3	6	5	0	2	0	1	0	18
10 県民	名詞	0	1	0	0	3	6	6	1	0	0	0	1	18
11 地	名詞	0	1	1	0	3	6	4	1	1	1	0	0	18
12 こめる	動詞	0	1	0	1	1	2	6	1	1	0	1	0	14
13 英霊	名詞	0	1	0	0	1	4	6	0	1	0	1	0	14
14 御霊	名詞	1	0	1	0	1	4	6	0	0	0	0	1	14
15 摩文仁	名詞	0	0	1	0	3	4	4	0	1	0	0	1	14
16 碑	名詞	0	0	0	0	2	5	3	0	1	1	1	0	13
17 慰霊	名詞	0	0	1	1	4	2	3	0	0	0	1	0	12
18 道族	名詞	0	1	0	1	2	2	4	0	0	0	1	1	12
19 会真	名詞	0	0	0	0	1	4	6	0	1	0	0	0	12
20 郷土	名詞	0	1	0	1	2	3	3	0	1	0	1	0	12
21 散華	名詞	1	0	0	0	0	4	5	1	1	0	0	0	12

表 5 建立時期ごとの特徴語抽出

早期					後期				
単語	品詞	属性頻度	全体頻度	指標値	単語	品詞	属性頻度	全体頻度	指標値
1 昭和37年	名詞	3	3	12.979877	昭和43年	名詞	3	3	12.025491
2 良い	形容詞	3	3	12.979877	恒久平和	名詞	2	2	6.204552
3 とげる	動詞	2	2	6.71886	昭和46年	名詞	2	2	6.204552
4 機会	名詞	2	2	6.71886	同胞	名詞	2	2	6.204552
5 昭和36年	名詞	2	2	6.71886					
6 壮烈	名詞	2	2	6.71886					
7 出身	名詞	3	6	4.29408					
8 命名	名詞	3	6	4.29408					

※Yates補正 χ^2 乗検定で5%水準で有意が出た単語のみ抽出。

表 4 はどの単語がどの時期に多く使われているか示す表である。建立時期中期以降に建立時期前期には使われていない単語が使われている。「平和」という単語は建立時期中期以降に多く使われている。

表 5 は早期、中期、後期の 3 つの時期に分けた建立時期で、その時期にのみ出現頻度が高い単語（特徴語）を分析した結果である。建立時期早期では建立された塔・碑の数は多くはないが、特徴とされる単語が多数存在する。建立時期中期では、建立された塔・碑は多いが、特徴があるとされる単語はなかったので表 5 から外してある。

(5) 「京都の塔」と「群馬之塔」

次に、原文を参照することにより、沖縄県民・住民に各慰霊碑がどのような言及をしているのかを見た。まず、碑文に沖縄県民または沖縄住民を入れているのは「京都の塔」と「群馬之塔」の2基のみであった。

群馬の塔では以下のように表現されていた。

大東亜戦争における沖縄での戦いは、当時、日本軍と全沖縄県民が一体となっており、その激戦の様相は、非常に凄絶なものがあつた。この戦場となった現地に沖縄と南方諸地域などで戦死した群馬県出身の戦没者を慰霊し、併せて世界平和を祈念するため、「群馬の塔」が建立された。

このように群馬之塔では、軍と沖縄県民の一体感が強調されていた。

次に京都の塔の碑文の該当箇所を見てみよう。

昭和20年春沖縄島の戦いに際して、京都府下出身の将兵2530有余の人びとが遠く郷土に想いをはせ、ひたすら祖国の興隆を念じつつ、ついに砲煙弾雨の中に倒れた。また多くの沖縄住民も運命を共にされたことは誠に哀惜に絶へない。とくにこの高台附近は主戦場の一部としてその戦闘は最も激烈をきわめた。星霜19年を経て今この悲しみの地にそれらの人びとの御冥福を祈るため、京都府市民によって「京都の塔」が建立されるにいたつた。再び戦争の悲しみが繰り返されることのないよう、また併せて沖縄と京都とを結ぶ文化と友好の絆がますますかためられるようこの塔に切なる願いをよせるものである。

昭和39年4月29日

このように京都の塔では、沖縄住民の被害についての共感と友好の絆を強調しており、群馬之塔と対照的な内容であった。

(6) 都道府県立の沖縄慰霊塔の評価

和光小学校の沖縄学習を企画・組織した丸木(1996)は、京都の塔について次のように述べている。「沖縄の各地に建つ慰霊の塔の多くが、日本軍の「勇戦敢闘」を謳い上げるものであるのに、この塔だけには異例にも住民の被害にも心をよせている」(p.185)。また、大田(2007: pp.34-35)は、「・・・沖縄には、沖縄を除くすべての都道府県の慰霊の塔が立っていますが、そのうち、地元住民の犠牲について触れたのは二基しかありません。そのひとつ、宜野湾市にある京都の塔の碑文は、次のようになっています。(中略)この京都の塔の碑文は、あくまで例外的なものでしかありませんでした。」と沖縄の立場から、京都の塔を評価しつつ、他の塔を批判している。

この様な都道府県立の沖縄慰霊塔に対してもっとも辛辣な記述は岡本太郎による次のような慰霊碑の芸術性と政治性の批判であろう(岡本, 1996: p.225)。彼はまず、都道府県の慰霊碑の芸術性について、金はかけているがセンスがないと批判している。

“ひめゆりの塔”のあたりは見ちがえるように整備され立派になっている。そこを過ぎてゆくと、ある、ある。両側にいくつも、いくつも、かなり宏壮な敷地に、規模の大きい、異様な記念塔が構えている。デカデカと相当の金をかけたものばかりだ。それにしても、そのデザイン、珍無類なこと噂にたがわず。正気の沙汰とは思われない。地方官僚とか政治ボスなどがいかに美に対してセンスがないかがわかる。まさにグロテスク・デザインのコンクールだ。

ああ、ここに代表された無神経「日本」。

次に、岡本太郎は各県での政治利用の問題を指摘している。

聴けば地方選挙を控えて、昨年後半あたり急にぞくぞくと建ちだしたのだという。碑の除幕式、戦没者慰霊を名目に、県議員だとか地方政界のボスどもが公務出張、つまり税金によるご招待の一大観光団体を組織してやってくる。序幕の模様をテレビに写させたり、オオッピラな事前運動だ。ところが、かんじんの遺族たちは旅費自弁なのだ。そんな話を聞くと、ここにもはい出している“黒い霧”。政治骨がらみの毒に、憤りをおぼえる。

岡本太郎はこのように述べ、慰霊碑の非芸術性と政治的性格を激しく批判したのである。このような批判とは対照的にアイヌ兵士と住民の絆である「南北の塔」について、安仁屋(1997：p.59)は、次のように紹介している。

沖縄本島南部の激戦地に真栄平という部落があります。一九四五(昭和二〇)年の六月半ば、この一帯では、アメリカ軍の猛攻をうけた日本軍が住民避難地域に入りこみ、さまざまに住民虐殺が行われました。真栄平の人口約九〇〇人のうち、生き残ったのは三九四人。全戸数一八七戸のうち五八戸は一家全滅です。このなかにあって、逃げまどう住民に特別の配慮をしてくれた日本兵の一団がありました。これが北海道出身の第二師団に属するアイヌ兵士でした。軍隊の中でも少数民族として差別され、虐げられていたアイヌ兵士たちは、日ごろから真栄平の人たちと心の交流がありました。虐殺の場面にてあって、アイヌ兵士たちは体をはって住民をかばったのでした。

この慰霊塔は、都道府県の塔ではないが、おなじマイノリティ同士であるアイヌとの交流という意味で、特筆すべきモニュメントであるといえよう。

最後に、沖縄戦の犠牲者と現代の戦争との関連性について目取真俊(2005：p.93)の実母の発言を引いての発言が注目される。

母の言葉を聞いた後考えたことがあります。それは沖縄戦のときに洞窟に潜んでいた日本兵や住民と、アフガニスタンの山岳部の洞窟に潜んでいたタリバン兵や住民の類似性です。圧倒的な武力の差を前に、地の利を生かしてゲリラ戦を挑むしかない。し

かし、それも難しく洞窟の奥で米軍の攻撃に耐えている。それに対して米軍は無差別の爆撃やミサイル攻撃を行っている。そういう構造が沖縄戦とアフガニスタンそっくりではないか。そして、米軍の攻撃も同じような発想で行われているのではないか、と思いました。

沖縄戦を学ぶことは、過去の問題ではなく、現代のわれわれの政治や生活を別の視点から見ることにより、未来につながることなのである。ところが、すでにみてきたように、都道府県によって建立された石碑には、沖縄戦についての言及がほとんどみられない。むしろ、沖縄の地を借りての、都道府県別戦没者総体の慰霊碑の沖縄支所のような性格のものが多かった。これに対しては、地元では沖縄の靖国化という批判の声もある。せっかく沖縄にきて慰霊碑から学ぶことが少ないというこのような残念な結果になっている。靖国化を憂う人たちの立場からみると、むしろ誤った学びをしかねないのである。

4 慰霊碑研究の意義：考察の視点

沖縄に点在する慰霊碑の評価に関して、その平和学的意味を、共同プロジェクト (Joint Project) という視点から考えてみたい。

ガルトゥング(2008)によれば、共同プロジェクトとは、包括的な和解のプロセスの中で、暴力化したコンフリクトの加害者と被害者とが、暴力のトラウマを癒やし、争いに終止符を打ち、未来の建設のために、共に再建に携わったり、将来像を一緒に考えていくことを重視する概念・実践である。

沖縄戦問題に関する未解決のコンフリクトとしては、第1に日本兵・沖縄県民と米英兵間のものがあり、第2に日本兵と沖縄県民間のもの、第3に日本人と朝鮮半島・台湾出身者のもの、第4に沖縄県民どうしのものが挙げられる。これらは、それぞれ、今日にいたるまでトランセンドされないままに、和解と共生の課題を残しているといえよう。

各都道府県の慰霊碑の内容の問題点を考察する上では、上記第2の本土出身の日本兵と現地沖縄の住民との間に生じたスパイ視、住民虐殺、強制集団死といったコンフリクトについて、どのように記述されているかがポイントになるであろう。

この観点からすると、その点に触れられたものが「京都の塔」以外には見られない。それどころか、本土各都道府県出身者の犠牲者のみを取り上げて英霊化する傾向すら見られる。

したがって、沖縄県民の中にある本土による暴力のトラウマは癒やされることなく、争いに終止符を打たれず、未来の建設のために共に再建に携わり、将来像を一緒に考えていく関係が築かれているとは言い難い。このことは、沖縄平和資料館の改築時の展示替え問題、少女暴行事件を契機とする安保体制問題、歴史教科書の強制集団死をめぐる記述・検定問題、大江・岩波裁判、米軍基地問題などのように、今日においても、沖縄・本土間のコンフリクトが繰り返し引き起こされる要因となっていると考えられる。

過去のコンフリクトを克服し、沖縄・本土関係を和解と共生の方向へとトランセンドしていくためには、沖縄戦時のコンフリクトについての事実を無視・軽視することなく、非

暴力と共感と創造性をもって、両者がその歴史的事実を共有し、記録しなおし、新たな記憶としていくための活動が求められている。

本研究は、そのような共同プロジェクトの不在と必要性を浮かび上がらせる結果を示すものといえるだろう。

5 まとめ

本研究では、以下のことを明らかにした。

- ① すべての都道府県が沖縄に慰霊碑を建立した。
- ② 沖縄戦戦没者のみ慰霊した塔数は少なかった。
- ③ 碑文を見ると「大東亜戦争」という戦前の表現を使った塔も見られた。
- ④ 沖縄住民への共感と友好を謳った碑文は1基のみであった。
- ⑤ 沖縄の慰霊碑は全般的に平和学習の対象となっているものの（村上, 2009; 大田, 2007 など）、都道府県ごとの慰霊碑は、京都の碑を例外として、平和学習の対象となるべき内容が明示されているものは少ない。その理由として、沖縄戦の戦没者に限定されていない慰霊碑も多く、沖縄戦の悲惨な実相についての内容を明示しているものが少ない。また、沖縄県民への言及が少なく、和解と共生の方法を学ぶトランセンド学習の観点からは教材として適切とは言い難い。

付記：本研究の元のデータは、宮崎郁江「沖縄の各都道府県別の慰霊塔・碑のテキストマイニング」として数理システム社の2010年度学生研究奨励賞に提出され佳作入選した。

【参考・引用文献】

- 安仁屋政昭 1997 『沖縄戦学習のために』 平和文化
- ヨハン・ガルトゥング 2008 「平和の探求」千葉真編『平和運動と平和主義の現在』風行社
- 池宮城秀意 1980/1987 『戦争と沖縄』 岩波書店
- 大久保潤 2009 『幻想の島 沖縄』 日本経済新聞出版社
- 大田平和総合研究所 2005 『60年目に問い直す 沖縄戦』 大田平和総合研究所
- 岡本太郎 1972/1996 『沖縄文化論：忘れられた日本』 中央公論新書
- 沖縄県博物館協会 2008 『沖縄の博物館ガイド』 東洋企画
- 沖縄県平和祈念財団 2007 『沖縄の慰霊塔・碑』 沖縄県平和祈念財団
- 沖縄県平和祈念資料館 2001 『沖縄平和祈念資料館総合案内』 沖縄平和祈念資料館
- 沖縄平和祈念資料館 2007/2008 『沖縄の戦争遺跡』 沖縄時事出版
- 沖縄平和祈念資料館 2008 『資料学習の手引き』 沖縄県平和祈念資料館
- 沖縄平和祈念資料館 2008 『平和への証言—体験者が語る戦争—』 アシスト
- 『沖縄をどう教えるか』編集委員会 2006 『沖縄をどう教えるか』 解放出版社

- 太田昌秀 2007 『沖縄の「慰霊の塔」 沖縄の教訓と慰霊』 那覇出版社
- 金明哲 2009 『テキストデータの統計科学入門』 岩波書店
- [記憶と表現]研究会 2005 『訪ねてみよう 戦争を学ぶミュージアム/メモリアル』 岩波書店
- 佐木隆三 1982 『証言記録 沖縄住民虐殺《日兵逆殺と米軍犯罪》』
- 仲宗根政善 1982/1989 『ひめゆりの塔をめぐる 人々の手記』 角川書店
- 成田龍一 2010 『「戦争経験」の戦後史—語られた体験/証言/記憶』 岩波書店
- 丸木政臣 1996 『わが教育の原点—こころのふるさと沖縄から』 新日本出版社
- 村上登司文 2009 『戦後日本の平和教育の社会学的研究』 学術出版会
- 目取真俊 2005 『沖縄「戦後」ゼロ年』 日本放送出版協会
- 吉田健正 1996 『沖縄戦 米兵は何を見たか 50年後の証言』 彩流社
- ひめゆり平和祈念資料館 2005 『墓碑銘』 ひめゆり平和祈念資料館

トランセンド 研究

ピース・スタディツアー

- 1 浅川和也・室井美稚子・石黒正員
フィリピン・ピース・スタディツアー
—平和への民衆のちから—

論文

- 10 いとうたけひこ・宮崎郁江・杉田明宏
沖縄の各都道府県別の慰霊塔・碑の特徴：
テキストマイニングによる分析
- 24 杉田明宏・いとうたけひこ・井上孝代
アニメ『みんながHappyになる方法』を用いた紛争解決教育：
大学新入生講座『アニメで学ぶ対立の解決』における
コンフリクト対処スタイルの変化

書評

- 34 藤田明史
奥本京子『平和ワークにおける芸術アプローチの可能性
—ガルトゥングによる朗読劇 *Ho'o Pono Pono:PaxPacifica* からの考察—』

アニメ評

- 36 藤田明史
アニメ『みんながHappyになる方法—関係をよくする3つの理論』を
めぐる対話

Articles

- 38 Johan Galtung
Rational Conflict Resolution: What Stands In the WAY?
- 43 Johan Galtung
Peace Mathematics—Does It Exist?
- 47 Johan Galtung
Japan's Spiritual Crisis

